

モノをつくる熱き思い、
伝統を受け継ぐ、新しい世代。

「昔から靴が、モノづくりが好きだった」と語る鈴木さん。「就職活動をする際、靴関係の仕事を探すものの、販売以外の仕事が見つかりませんでした。そんな頃に現在講師を務めている靴デザイン・クラフトスクールを見つけ、すぐに入学を決めたんです」。

スクール卒業後もそのスクールの代表であり、ダンスシューズ専門メーカー吉田商事代表の吉田明輝さんに師事し、靴づくりの修業を始めた。そして本年度行われた革靴製造技能試験の1級に東海地区でただ1人合格。また、30歳以下での合格も1人だったため、若手靴職人として注目を浴びることになった。「やはり専門的な知識が必要なので、授業だけでは分からないことがたくさんあります。師匠について、実際に目で見て感覚で覚えることが大切なのです。そして今後は革靴職人として、昔ながらの技術や製造方法を後世に残していきたいと思っています。自分は死ぬまで靴職人であり続け、靴作りに携わってみたいですね。その思いは、ひとつひとつ丁寧に作る革靴にこめられているのだろう。

●プロフィール
鈴木達也さん(30歳)。靴デザイン・クラフトスクール卒業後、吉田明輝に弟子入り。現在は名古屋市区にある「靴デザイン・クラフトスクール」の講師として、次の世代へ革靴づくりの伝統技術を伝えている。



瀬戸基準、世界へ

「せともの」の大きな挑戦
1000までのリアルナンバリングを付けて、まずは個数限定の販売となった「オートクチュールプロジェクト」のデュアルカップ。事業の第一歩がはつきりとした形になり、それに続いて現在では第二、第三のプロジェクトも進み始めているのだ。

タッグを組み、飲み方まで含めた「せともの」の提案をする「お茶プロジェクト」や、安全で環境に優しい、今までになかった夢の新・陶器の開発を進める「瀬戸基準プロジェクト」などがすでに開始されている。「せともの」は、今後も更なる飛躍を目指し歩み続けていくだろう。

加藤さんの作品の一部



本年度「地域産業資源活用事業計画」として認定 現代ニーズをつかむ「常滑焼 フローライフ」

愛知県にあるもう一つの日本六古窯「常滑焼」。その歴史は平安時代からと古く、大型の甕や壺などの大型製品の産地として発展し、明治時代には陶管やテラコッタタイルなどが作られるようになり、現在では、急須、食器、花器、置物、植木鉢、タイル、衛生陶器など多様な製品群を誇る。

中部国際空港開港にあたり依頼された巨大プランター。この制作をきっかけに職人たちの熱気が強まり、常滑焼の強みである大型焼き物のPRが始まった。

産地メーカーが丸となったプロジェクトが組織され、ヨリコ造り技術(ひもづくり手法のひとつ)を活かした浴槽の製造を実現し、平成17年より販売を開始。古くから大型の壺や素地を硬く焼締める技術に秀でていた常滑焼で造られる浴槽は、重厚感ある質感が特徴で、陶彫細工の華麗さと相まって、特にホテルや旅館などから

好評を得ている。日常生活で癒しや精神的満足を求める傾向が強まる中、「常滑焼 フローライフ」と名付けられた新ブランドはさらなる発展を目指す。



DATA
とこなめ焼協同組合
愛知県常滑市栄町3-8 tel.0569-35-4309
http://www.japan-net.ne.jp/~yakimono/

伝統と進化

一越今
歩るを

伝統は止まらない

伝え守るだけではない、新たな一歩を作りだす
およそ1300年の間、焼き物の歴史と伝統を守る瀬戸市。この地区は豊富な陶土と焼き上げの燃料となる赤松の木に恵まれており、古代から現代まで生産を続けている窯場である。また、日本六古窯のひとつとして有名で、その名は「せともの」の瀬戸市として広く知られている。現在「せともの」は、焼き物の代名詞として、世界の人々に知られ、この地区で作られる器は、陶器の代名詞ともなっている。

業用ファインセラミックスまで多岐にわたり、「古き良き」をただ伝承するだけではなく、瀬戸の「伝統」として進化し続けているのだ。そして2005年の愛知万博が契機となり、生地、型、製陶、釉薬、卸と分業化された瀬戸市の陶磁器業界から、若手の有志が垣根を越えて自主的に結びつき、平成18年度よりJAPANブランド育成支援事業の認定を受け、瀬戸・究極のせとものブランド確立事業を実施することになった。



▲片手で持った時に女性の手のかたがきれいに見えることも「100のこだわり」のひとつ



▲今まであまり接点がなかった商・工が手を取り、瀬戸商工会議所がフォローし取りまとめるかたちでこのプロジェクトを開始

目指せ、究極の品質

「瀬戸・究極のせともの」プロジェクト始動！

立ち上がった陶磁器業界の有志たちは勉強会を実施し、消費者が購入・使用するときのシチュエーションを考え、自分たちの気持ちとの温度差に気付いた。そこで、問題点を解消し、「せともの」を発展させるためにJAPANブランド育成支援事業を活用し「究極のせともの」への挑戦として3つのリーディングプロジェクトを開始。そのひとつが「オートクチュールプロジェクト」である。

まずは器によるビールの味の違いを追求するため、ビール会社の協力を得ながら各地のイベントでカップの試作品を使う試飲会を行った。そこで得た感想をもとに、質感や厚さ、



伍春窯五代目・加藤克巳さん。デュアルカップの成形はすべて加藤さんが担当

プロジェクトチーム

平成17年11月から独立行政法人中小企業基盤整備機構の「地域ブランドアドバイザー派遣事業」を受け、今までにない瀬戸独自のブランド確立のために勉強会を開催。その後平成18年度にJAPANブランド育成支援事業の認定を受け、瀬戸のシンボリックな取り組みとなる3プロジェクトの展開やそれにともなう市場調査を実施している。また現在、メンバーによる新たな組織づくりも検討している。



DATA 瀬戸・究極のせとものブランド確立事業

【参加事業者】
有限会社伍春、彩り工房 優、江風陶苑、日本陶芸株式会社、有限会社スズカ、カネ秋長江陶器店、株式会社丸幸中島、有限会社水野釉薬、株式会社エム・エム・ヨシハシ
【事務局】
瀬戸商工会議所
瀬戸市見付町38-2 Tel. 0561-82-3123
http://www.setocci.or.jp/

日本初の取り組み

愛知県では、国で造成されたデュロック種系統豚である「サクラ201」を20年以上維持・増殖し、農家へ譲渡してきたが、近年、系統豚としての寿命が近づいてきたことから、農業総合試験場において平成12年からデュロック種の新系統造成に着手した。系統豚とは、遺伝的に改良された豚の集団で、その中でもどの豚でも

能力が均一である。この造成は、岐阜県畜産研究所との間で取り組み2県の共同研究という形をとり、これは日本初の試みとして注目されるものである。

私たちの食卓へ並ぶ愛知県産豚肉の多くは、ランドレース種と大ヨークシャー種の間生まれた雌に「デュロック種」の雄を掛け合わせた雑種

研究と創造



▲ 成体の「アイリスナガラ」

(三元肉豚)で、生産性や肉質、健康面の良いところを受け継いでいる。農業総合試験場では、この基となる系統豚を日々研究を重ねて改良している。その過程は最低でも5〜6年ばかり、実際に将来飼育を手掛ける農家や、養豚関係団体などの意見を取り入れつつ、選抜を繰り返していく。

これまで愛知県では、系統豚として「ランドレース種」「アイリスL2」と「大ヨークシャー種」「アイリスW2」を造成・維持してきた。そして今回、新系統が誕生したわけだが、農事試験場が明治26年に発足し、100年以上もの期間積み重ねられてきたさまざまなスキルやノウハウを持つ、新しい系統豚を作り出すのはやはり苦勞を伴う作業であった。アイリスナガラの造成は、平成12年に導入費用200万円をかけてアメリカからデュロック種の雄11頭と雌40頭を導入したことに始まる。そしてそれらの導入豚と、その産子から基礎となる豚を構成する作業が進められてきた。愛知県と岐阜県との間では、人工授精の手法を用い、また、さまざまな情報を交換しながら系統造成を開始し、共通の育種目標として「発育・産肉性が良く、肢蹄の強健性に優れた系統豚の開発」を掲げて日々研究が重ねられた。より良い系統を残すための選抜時には、

新系統創造の苦勞

少しずつ前へ進む大きな力

一越今歩るを



▲畜産研究部・豚グループのメンバー

愛知と岐阜両県の担当者が一貫した方向性で相互の豚を見比べ、農家や関係団体を交えて体型評価会を開催するなど、幅広く意見を聞いている。消費者のニーズに合う豚を造成するため、多くの声を取り入れて、それをさらに生かす研究を6年も続けてきた結果が平成19年に実を結び、次のステップへ進むことになった。

▼生まれたばかりの子豚



始まる、農家での飼育

私たちの食卓へ並ぶ日も近い

平成19年2月に完成し、7月に社団法人日本養豚協会より系統認定された「アイリスナガラ」は、改良の着手から7年経った平成20年2月より県内農家への譲渡が始まり、本格的な飼育が各農家で始まった。また、これまでに維持していた2系統に

デュロック種の系統豚が加わったことにより、県が造成した系統豚は3系統揃ったことになる。「アイリスナガラ」を利用した肉豚生産への期待をはじめ、愛知県の系統豚のみを使う新しいブランド豚への期待も今後は高まりそうだ。

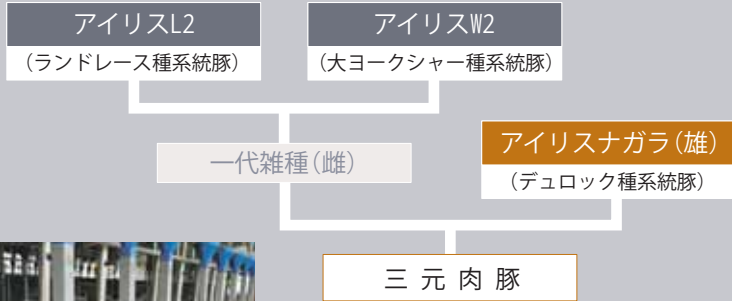
「アイリスナガラ」の特徴

『「アイリスナガラ」は産肉性がとても高いのが特徴で、1日平均増体重が1,000グラム以上と発育がよく、背脂肪厚も2.0センチ前後と適度です。県職員ならびに飼育に携わるすべてのメンバーが長い年月をかけて協力しながらつくりあげた系統豚です。生き物相手ということで、なかなか思うように進まないことも多いですが、新しい系統が出来上がったときの喜びはひとしおです。』

◀ 畜産研究部 豚グループ主任 山本のみ子さん



愛知の三元肉豚ができるまで



DATA

愛知県農業総合試験場
愛知県愛知郡長久手町
大字岩作字三ヶ峯1-1
Tel.0561-62-0085
<http://www.pref.aichi.jp/nososi/>

明日の愛知の水田農業を担う
新品種の水稲が誕生！



全国的にも優れた米どころとして知られる愛知県。更なる発展に向けて愛知県農業総合試験場では、病害虫への抵抗性が全国トップレベルの水稲が開発された。

『現在は「愛知108号」という名前ですが、これから正式な流通名が決まり、愛知県の主要な品種として平成22年から一般の農家でも作ってもらうことになっています。』

「愛知108号」の開発は平成5年8月より始まり、平成19年3月に新品種として完成しました。だいたいひとつの品種をつくるのに10年くらいかかるものなのですが、この品種は13年以上かかりました。携わった研究員も18名になります。しかし、そのかいがあって現段階で考えられる欠点がないのと、現在流通している品種と比べて味や収穫量の面でも優れていることが大きな特徴となっています。来年度より、実際に食べていただける機会がどんどん増えると思います。楽しみにしてくださいね。』



作物研究部 作物グループ主任 中村 充さん



▲「愛知108号」が研究されている試験場内の水田

少しの気持ちで明日へ繋がる

地球への優しさ

2005年の愛知万博を大きなきっかけとして、多岐にわたるエコ活動を展開している愛知県。今「エコモビリティ ライフ」を言葉に新しいエコライフスタイルの提案を始めていく。

「エコモビリティ ライフ」とは「車

と公共交通、自転車、徒歩などをかきこく使い分けるライフスタイルの実現のこと。

CO2削減に向けて過度な自動車の使用を減らし、環境に配慮した交通行動を軸とする生活を広めようという取り組みだ。

共生と未来

越え 歩るを



▲あいち エコ モビリティ ライフ フェスティバルの様子

「エコモビリティ ライフ」が多くの人に普及し、県民ぐるみで推し進めるプロジェクトとなるよう、8月23日に愛・地球博記念公園で「あいちエコモビリティ ライフ フェスティバル」が開催された。フェスティバルには神田真秋知事とイメーჯキャラクターを務める水野裕子さんも参加し、エコモビリティ ライフの大切さをアピールした。



▲藤が丘駅と会場となった愛・地球博記念公園を結ぶ、県内の小学生がデザインした東部丘陵線(リニモ)日本初の常導磁気浮上式システムが採用されたリニモは、浮上して走行するため、騒音・振動が小さく、沿線環境にやさしい乗り物である



▲車内には他の応募作品が中吊り広告風に展示されている

◀環境にやさしい乗り物として、愛・地球博で活躍したペロタクシーも登場した

フェスティバル会場で配布した「エコPRグッズ」

◀スタンプラリーでスタンプを集めた参加者に配布されたオリジナルのピンバッジ

スタンプラリーで配布されたエコマネーカード。愛・地球博の入場券がエコマネーを貯めるカードとして使われており、名古屋市内地下鉄や東部丘陵線(リニモ)の一部の駅にはエコマネー発行の読取機械が設置されている

身近なところから始める

エコモビリティ ライフへの一歩

「エコモビリティ ライフ」活動のモデル地区の一つとして取り組んでいる東部丘陵線リニモ沿線。ここでは、定期券利用者、乗降駅からの通勤・通学手段として使用するための自転車を無料で貸し出す試みが6月16日から始まった。

自転車と環境に優しいリニモを組

み合せることで、沿線の渋滞緩和とCO2削減を目指す画期的な取り組みとして注目されている。

現在この自転車貸し出しは、愛知県からの委託を受けた「自転車ジョイ長久手店」にて先着順で受け付けている。



▲東部丘陵線「秋ヶ池公園駅」よりすぐの場所にある「自転車ジョイ長久手店」



▲フェスティバルの開会セレモニーには、愛・地球博のマスコットキャラクターとして人気のモリゾーとキッコロも駆けつけた

まだ始まったばかりの挑戦

美しい環境を未来へ

愛知名古屋で2010年に開催される「生物多様性条約第10回締約国会議」(COP10)に向けて、大きく動き出した愛知県。「エコモビリティ ライフ」の活動も、シンボルマークや絵日記、標語などの募集や、「県民の集い」の開催など、活動はまだまだ始まったばかり。

ここ愛知県には緑が茂る山々や多くの生物の源となる海など、豊かな自然が溢れている。人と自然の共生こそが本来あるべき姿だが、現在はいまぐれ共生しているだろうか。



あいち エコ モビリティ ライフ

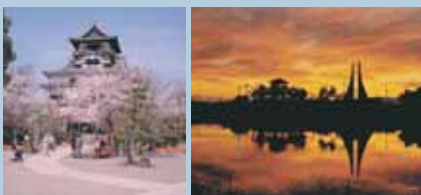
▲応募作品の中から選ばれた「あいちエコモビリティ ライフ」のシンボルマークとイメーჯロゴ

愛知県が全国のモデルとなり、環境保全に向けた小さな一歩を踏み出す人が増えることに期待したい。

Other Challenge

「美しい愛知づくり 景観資源600選」を指定

“あなたの「とっておき」をみんなの「とっておき」に！”をテーマに公募された地域の良好な景観のなかから、612カ所の景観が「美しい愛知づくり景観資源600選」に指定された。



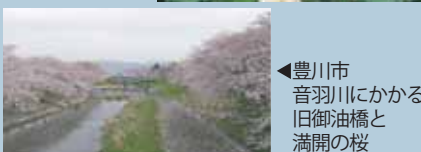
▲犬山市 犬山城 ▲蟹江町 茜空の水郷 (佐屋川創郷公園)



▲新城市 四谷千枚田



▲小牧市 小牧山からの眺望(小牧長久手の戦い)



▲豊川市 音羽川にかかる旧御油橋と満開の桜



▲豊根村 天竜奥三河国定公園 茶臼山 「美しい愛知づくり景観資源600選」より一部を紹介